第1章

序論

1.1. 研究背景

第二言語習得における母語の影響は「言語転移」と呼ばれている。学習者は第二言語を学習際に、当然のことながら、第一言語である母語の影響を受ける。「母語からの転移」とは、学習者が第二言語を学習する際に、母語の特性に影響を受けることを言う。転移は、さらに「正の転移」と「負の転移」と区分させる。「正の転移」とは、母語からの影響が習得する際に良い方向に働く場合で、そのため習得を促進させると一般に考えられている。一方、「負の転移」とは、母語の特性が第二言語の習得に悪い方向に働く場合で、別な、「干渉」とも呼べる。つまり、干渉とは外国語を学習しているときに、母語の影響で誤用が起きることである。

外国語習得における干渉の一例は、日本語学習者（以下「JFL[1]」）の日本語の談話での視点の置き方に干渉である。いくつかの言語研究では談話を構築する際に視点の置き方は異なっているため、目標言語の談話での干渉が起きることがある。そしてこのことが、文章は文法的に正しくても、日本語話者(以下「JNS[3]」)が不自然の文章と感じる一因となっていることが分かった。

JFL の視点習得における研究(田代 1995; 渡邊 1996; 田中 1996, 1997; 金 2001; 栗原 2003 など)によって、次のように指摘している。JFL の談話は、JNS にとってどこか不自然でわかりにくいという印象を与えるが、これは JFL が談話における母語干渉があって、視点の置き方を意識できず、主人公となる人物に視点を固定できないことに原因があるのである。.

久野 (1978: 129) は視点をカメラ・アングルに等しいものと定義している。つまり、視点とはある出来事を描写する場合、話し手はどこにカメラを置いてその事実を捉えるのかという考え方である。.そして、久野は視点の置き方は日本語に限られた現象ではないと指摘している。

林(2005: 34) は渡邊（1992, 1996）の研究結果を述べている。渡辺は４コマ漫画を用い、JNS には日本語で、中国人学習者(以下「CJFL[2]」)には日本語と中国語でナレ―ションさせて視点の調査を行った。その結果、中国人学習者の談話の構築における視点の捉え方には日本語話者との間に共通点がほとんど見られないことが明らかになった。日本語話者は「ある人物寄りの視点」で、中国人学習者は「中立視点」で、それぞれの談話を展開しているという結果が得られた。

その結果は、JNS は CJFL との視点の置き方が特徴のある。それは、久野の述べたように、日本語の談話での視点の置き方は他の言語の置き方とは異なっていることがある。 したがって、干渉を避けるように、日本語の談話での視点の置き方は他の言語の置き方とは異なっていることを学習者に気づかせる必要性があると考える。

林 (2005: 33) は CJFL の視点の習得問題に関する先行研究によって以下のことが述べている。田代(1995)、坂本・康（2000）は CJFL の視点習得における問題点を次のように指摘している。中・上級レベルの CJFL の文章は、JNS にとってどこか不自然でわかりにくいという印象を与えるが、これは CJFL が談話における視点を意識できず、主人公となる人物に視点を固定できないことに原因があるのではないかとしている。以上で述べたように林 (2005) は視点習得のことを JFL に気づかせる必要性があると考える。

林 (2005, 38) 視点を 3 種類に類型化する。まず、「固定視点」とは、談話の開始から最後まで授受補助動詞を使い、ある一定の人物に視座を固定。次に、「移動視点」とは、談話の開始最後まで授受補助動詞を使い、登場人物 に視座を据えるが、その他の人物にも視座を移動する。最後の「中立視点」とは、談話の開始から最後まで授受補助動詞を使用せず、どの人物にも視座を据えることがなく談話が展開される。JNS は談話の始まりから終わりまで、ある一定の人物に視点をおいて話を展開させている。

視座の置き方によって視点習得問題以外, JFL の談話または文章については、これまでいくつかの研究が行わ れてきた（田代 1995、渡邊 1996、金 2001、林 2004 など）。その中で共通して指摘されているのは、談話における視点の一貫性の問題である。日本語学習者の文章は文法的に正しくても、或いは文法的な誤りを訂正してみても、その内容がなお日本語母語話者にとってどこか不自然で違和感を覚えることがある。その不自然さは、

談話における「視点の一貫性」の意識していないと深く関連していることが指摘されている。

「視点の一貫性」日本語の談話を構成する基本的な条件の一つである。「視点の一貫性」は単一の文は、視点関係に論理的矛盾を含んでいてはいけない、という制約である。日本語談話で文脈は何れの視点を択ばれたかを示す構文的手がかりがある 。視点に関して立てた仮説で、適格文と自然文は構文的手がかり制約と視点ハイアラーキー制約が注意すべきことがあると説明できる。それらは単一の視点関係しか持ち得ない。

視点ハイアラーキーは談話の人物に対する話手の共感度である。「共感度」とは、一人の談話人物に対する話手の自己同一視化の度合である。話し手の高く共感度を得る談話人物が話し手の視点になる。

謝 (2008) は視点を視座と注視点に定義した。視座とは「どこからみているか」を示し、構文的手がかりがあり、視座があると定義する。注視点とは「どこを見ているか」を示し、構文的手がかりがなく、注視点があると定義する。

授受表現とは、ものを与えたり、ものを受けとったりすることを表わす表現のことである。授受表現といった構文的手がかりから話し手の視座が判断されたため、その表現は視座手がかりと呼ばれている。

話者が出来事をどの人物寄りに見ているのかにより、用いられる表現が異なる（久野、1978）。以下はその例である。

(1)　太郎ガ花子ニオ金をヤッタ。

(2)　太郎ガ花子ニオ金をクレタ。(久野, 1978: 141)

話者自身が授受行為に関与する場合には、「あげる」文においては主格に、「くれる」文においては与格目的語に「私」が配置されなければならないという制約があることから、上記の例文においては、それぞれ「太郎」、「花子」に視座があると考えられている（久野、1978）。このように, 授受表現は話し手の視座を示すことが見られた。

視点の中で、授与動詞の視点制約がある。「授与動詞の視点制約」とは授受表現を使用する際に共感度関係の制約ことである。授与動詞の視点制約から話し手の視点が説明できる。.

以上で述べたように、 JFL の談話における適格文と自然文に関して視点習得先行研究には、JFL は一貫性の視点を意識していないと原因になることが分かっている。授受表現文が適格文と自然文というのは共感度関係に理論的予盾を含んでいない場合である。しかし、多くの JFL はこの視点の概念を意識.していないことが従来の研究によって示されている。

インドネシアでこれまでに授受表現を扱った先行研究は多い。日本語習得の視点から授受表現を扱った文献も数多く存在する。しかしながら、視点の一貫性により自然さ授受表現の文脈を扱った研究がまだ見当たらない。なお、インドネシア語のやりもらい動詞には日本語の授受表現との間に共通点がほとんど見られないことなど、問題がある。

インドネシア語表現には授受表現との同一ことが見られないため、インドネシア人日本語学習者（以下「IJFL[4]」の視点の置き方に影響を与える可能性がある。.次は IJFL の談話展開である。

今月１２日はタケルさんの誕生日です。タケルさんは父から新しい自転車を(3) もらいました***(Shiza: Takeru)***。その新しい自転車は弟に (4) 見せてあげられました***(Shiza:Takeru)***。弟は楽しく感じて、その新しい自転車に乗ってみたいです。実は、弟は自転車に乗ることがまだ上手ではありませんが、弟はタケルさんからその自転車を (5) 貸してもらいました***(Shiza: Otouto)***。自転車に乗る時、前の木をぶつかりました。その自転車は壊れてしまいました。怒っているのに、猛さんは弟に (6) 助けてあげました***(Shiza: Takeru)***。

談話例では、話し手は漫画のストーリーテリングの内容によって適切な授受表現を使用した。しかし、話し手は、視点を固定できず、ある一定の人物に視点を置いて話を展開させていない。

(3) と (4)は,話し手は「たける」に視座を置いている。他方、 (5)は,「弟」に置いている。 (6) では、話し手は繰り返す「たける」に視座を置いている。

以上の談話では、授与動詞の視点制約は視点ハイアラーキーとの共感度関係は互いに予盾 し、「視点の一貫性」の原理に反して授受表現文を作られることもある。

(5)　弟はタケルさんからその自転車を貸してもらいました

(5) は「授与動詞の視点制約」によると、「～てもらう」は、話し手の視座が「弟」寄りである。他方、「対称詞の視点ハイアラーキー」によれば、「たける」、「たけるの弟」という対称詞が用いられている場合には、「たける」寄りの視座が取られている。論理的予盾を含んだ共感度関係を指定する。(5)が不適格文であるのは、このためである。

IJFL は「移動視点」で談話を展開させるため、以上の談話は不自然文章、ということになる。インドネシア語のやりもらい表現は「視点の一貫性」や「視座構文的手がかり」の機能をを示ず、母語の影響で誤用が起きる可能性が高いと考える。その問題が IJFL は JNS との視点を置き方が異なっているの原因になる可能性がある。また、その問題のため、IJFL は「中立視点」で談話展開するの可能性もあると考える。それ以外、ほかの干渉もあると考える。その事態を知るため、IJFL の談話展開における、授受表現を用いた視座構文的手がかりを中心に、視点習得を検討する必要があると考えられる。

以上の問題点を踏まえ、本研究は, 授受表現使用から見た IJFL の談話展開における視点習得について挙げられる。 6 コマ漫画を用い、IJFL を対象研究である。研究の課題は, ***授受表現使用から見たインドネシア人日本語学習者の談話展開における視点の習得研究。***

本研究では、授受表現使用から見た IJFL の談話展開における、視座の置き方や、「一貫性の視点」による IJFL の適格文や、学習者母語によっ

て干渉はどのようであるかをデータの分析を通して質的に探ることを目的とする。本研究は、視座に焦点を置いた論評限り、注視店が挙げられない。

1.2. 先行研究

林(2005: 34)は、坂本・岡田（1996）、岡田（1997）の視点と密接な関係がある授受動詞の習得研究を参照した。それらは空欄充形式のアンケート調査が挙げられる。坂本・岡田(1996)では、授受動詞の習得は「あげる→もらう→くれる」という順序で進むとし、「あげる」構文の習得が早い段階で進む理由は視点が主語と一致しているからであると結論付けている。

また、岡田 (1997) は、初級レベルの CJFL には授受表現における視点の位置を理解するのが難しいため、「あげる」と「くれる」の混同 が多く見られるが、初級を終了する頃には「～（て）あげる」の構文をかなり正しく使えるようになっていることを示した。さらに、中級レベルになると、「～（て）あげる」の過剰使用はなく、「くれる」と「もらう」が多少使えるようになるが、視点の位置付けがまだ不正確なため、「くれる」と「もらう」の混同による不適切な使用がまだ見られた。したがって、日本語のレベルが上がるにつれ、授受表現を使えるようにはなるが、視点の置き方は必ずしも適切になるとは言えない。

次は、林(2005)は 漫画を用い、 CJFL を中心に談話における視点を調査した。その結果、まず。学習時間が長くなるにつれ、受身表現の習得は進むと言えるが、授受補助動詞はそうと言えない。次に、学習年数が長く

なるにつれ、談話を展開する際にある一定の人物に視座を固定する傾向が強くなる。

以上のように、これまでの研究によって、CJFL と JNS の視点の捉え方とは異なっている。そして、このことが CJFL に母語影響させることが分かった。その研究の結果を踏まえ, 日本語における視点について、これまで異なるアプローチ____日本語学、認知心理学、対照言語学____から数多くの研究が行われてきたが、インドネシア人日本語学習者を対象に研究は、まだ見当たらない。それゆえ、IJFL の視点習得問題を知るため、まず IJFL の視点置き方に関する研究が必要である。

1.3. 研究目的及び研究課題

授受表現使用から見た談話展開における IJFL の視点がどのように習得されるかを明らかにする。この目的に基づき。次に３つの研究課題を設ける。

a. IJFL の授受表現使用の談話展開における、視点の置き方から見たどのような視点習得について考察する。

b. 「視点の一貫性」による、適格文と自然文から見たどのような IJFL の談話の視点習得について参考する。

c. 第二言語の日本語で授受表現使用の談話を展開する際に IJFL の視点習得はどのような干渉があるかについて参考を試みる。

1.4. 課題制限

研究問題点が拡大ことを回避するように、以下の４点に問題を制限される。

a. 調査対象者として学期６のインドネシア教育大学日本語学習者（20名）によってデータを用いた限りである。

b. 視座の置き方限り、視点習得を分析する。

c. 授受表現使用から見た限り、視点の置き方や「視点の一貫性」ことを見られる。

d. 視点の置き方や「視点の一貫性」によって視点習得限りに重点を置き、授受表現分析する。外の点には挙げない。

1.5. 研究成果

本研究の結果は、理論的に、また実用的にも有益な成果をもたらすものと思われる。

a. 本研究の結果は、日本語教育のために、第二言語として日本語談話を構築する際に「日本語の視点」のことを IJFL に気づかせる必要性があると成果をもたすものと思われる。

b. 本研究の結果は、日本語の教材に、作文や文法を学習する際に「日本語の視点」からどのように授受表現を導入するすべきかを提案になることを求める。

c. 本研究の結果は、IJFL の視点の問題にかんする次の研究のために、提案になることを求める。

1.6. 研究方法

1.6.1 調査対象

本研究では、2012 年 2 月にインドネシア教育大学で 6 学期の日本語を専攻する学習者 20 人を対象に、談話における視点の習得状況を調査した。

1.6.2 使用題材

魏（2010）の先行研究で使用されていた 8 コマから 6 コマになる漫画を使用した。全調査対象者に 6 コマ漫画は作った参考リストと一緒に配った。参考リストは筆者によってインドネシア語で作成されたものである。インドネシア語の参考リストは以下である。

a. Takeru memperlihatkan sepeda barunya kepada adiknya.

b. Adiknya ingin meminjam sepeda baru tersebut.

c. Takeru meminjamkan sepeda barunya kepada adiknya.

d. Adiknya menabrak pohon dan jatuh.

e. Takeru marah karena sepeda barunya rusak.

f. Tapi setelah itu, Takeru menolong mengobati luka adiknya.

1.6.3　談話データの分析方法

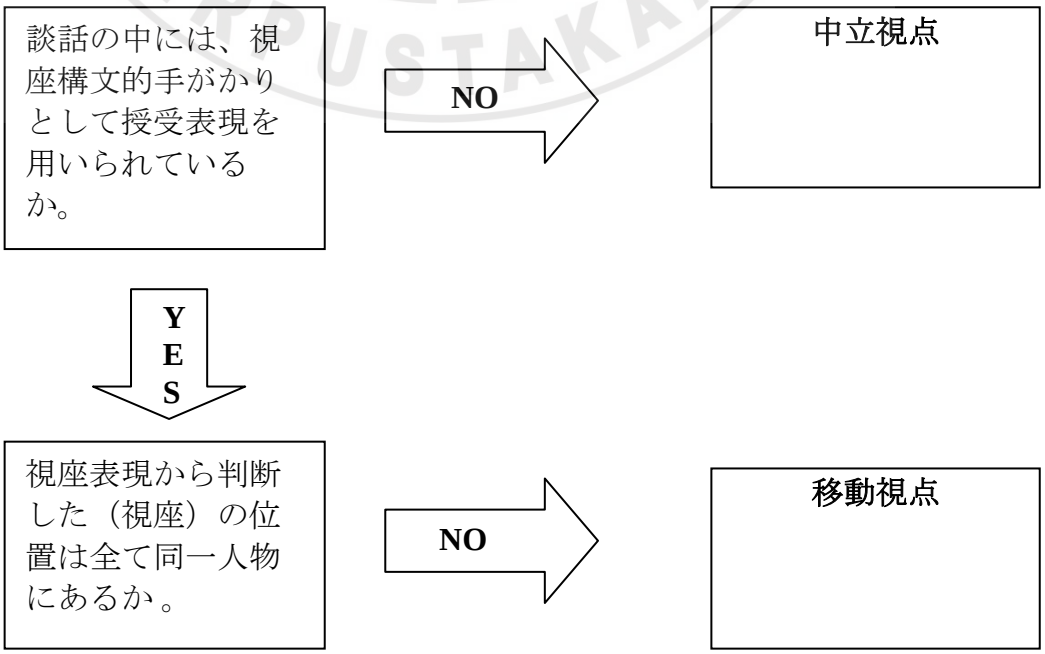
本研究では、談話データの分析方法の具体的は以下である。

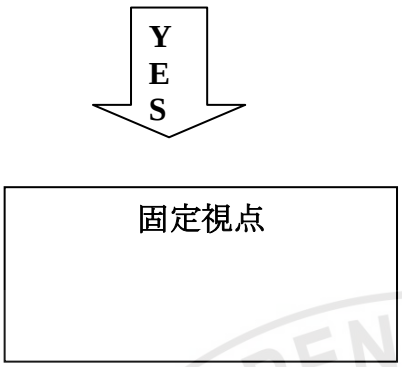
a.　データ収集の方法

全調査対象者に 6 コマ漫画は作った参考リストと一緒に配った使用題材を、登場人物が 2 名の漫画のス トーリーを記述してもらった。ストーリーテリング方を用い、*takehome* させる。この際、１）授受表現を使用すべきの記述はしなく、展開する方法は自由である、２）漫画は２登場人物はと展開すべき *clue* しか配らない、３）登場人物の人物設定は自由である、４）字が 300 以上である、５）辞典を使用するか自由であり、という指示を与えた。

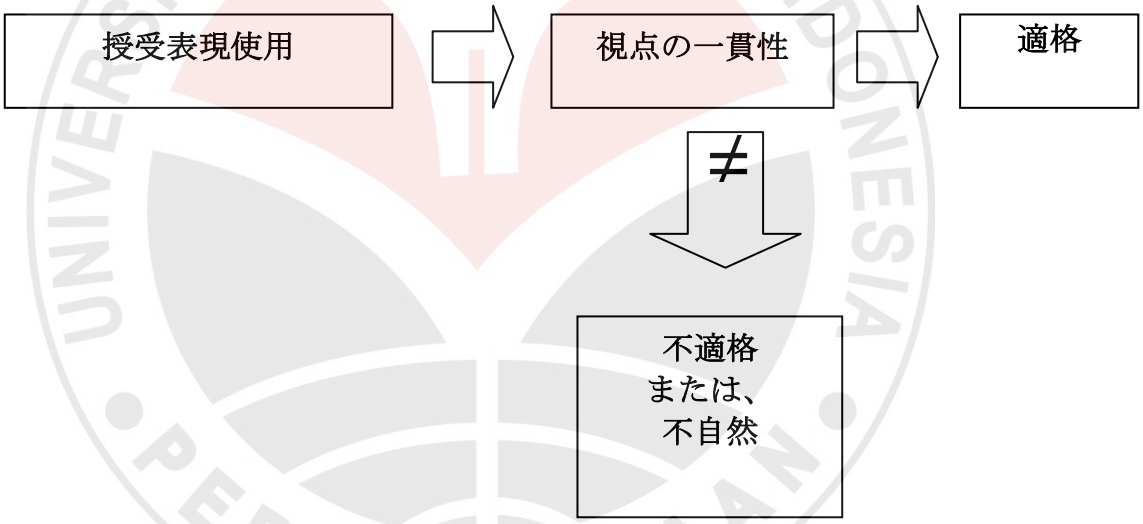
b.　データ分析

1.　談話において、授受表現使用するから見た「視座の置き方」を知るためである。





2. 「視点の一貫性」における、適格文と自然文から見たどのような **IJFL** の談話の視点習得について知るためである。



3. 第二言語の日本語で授受表現使用の談話を展開する際に **IJFL** の視点習得はどのような干渉があるかについて知るためである。

1) 以上の a と b を結論をまとめる。

2) 結論をまとめる。